

「スペキュレーションの会の御案内 紹介文」

岡和田晃

〈山野浩一未収録小説集〉、小説作品はまだ二十作以上残っているのですが、今回は趣向を変えて、それらとは別の、小説と小説ではないものの境界線上にあるような作品をお届けしたいと思います。ジャンルの境界を軽々と渡り歩く、山野さんらしい仕事ですね。

今回ご紹介するのは、「NEWSF」のNo. 3（一九七一年三月）に掲載された「スペキュレーションの会のご案内」です。

「NEWSF」は翻訳や創作のワークショップ、あるいは読書会を精力的に開催し、そこから多数のプロが巣立ったのがご承知の通りですが、この「NEWSFワークショップ」の前身にあたるのが、今回紹介する「スペキュレーションの会」と推定されます。

しかし……。案内文を読んでいただければわかるのですが、この会、本当に行われたのでしょうか？ 関係者に聞き取りを試みたことがあるのですが、わかるはずもありません。「会の終了後、会でいかなることが起こったとか、いかなる発言があったというようなことを認めることは誰もでき」ないのですから。

「NEWSF」にはこの「スペキュレーションの会の御案内」に限らず、虚実ないまぜにした諸々の企画が行われてきました。

文面だけ読むと、なんだかカルト宗教か自己啓発セミナー、マルチ商法のなんかのように見えるかもしれませんが、どこまでも「個」の立場を貫き、他者とのつながりを拒否している点が大きく違います。

それと、お金の二オイがしませんね。この点も重要です。

そもそも、カルト宗教なんかが広く社会問題化する前に書かれたものであり、現在の状況では不可能な「案内」かもしれません。

そうではない、と思われる方は、新世紀にふさわしい「スペキュレーションの会」を開催してみてはいかがでしょう？

なお、本文は無記名でしたが、関係者への聞き取り調査、文体などから、山野浩一氏の筆になるものと判断し、「SF Prologue Wave」に掲載するものです。

又ムが探しまつてきたひとつの（原光華）に誘着させることとなるのである。

こうした秀れた（内宇宙）の探険者前にして、パラードの「終着の浜辺」は失敗した。日の丸・衛星の意味しか想い得ないと言つていいだろう。

或いは「終着の浜辺」は早なるアロゲレス・レポートであり、我々は次の発展経過に期待することができるのか。またはそうした限界性はパラードによつて乗り越へ不能な障壁なのか。だとすればパラードは何處へ行くか？

パラードは何處へ行くか

パラードの完全な対極から出発しながら、そのマニフェストの完璧な（そして自然な）体現者として鳥尾麻雄がいただろう。しかしこれをもつてパラードの行為をアメリカ製（ニュー・ウエア）と同レベルのSF内的誤謬と呼ぶことは二重の意味で不可能である。ひとつには、パラードの作業がその方向は確認されていたとはいへ今だに再消化はしていない未開地を志向していること（もつとも相応に不産産屋の手はひびいているが、もうひとつには、以後のパラードはむしろこの方向を放棄して、そこで

突きあつた限界性をこそ武器として新たな探求を始めるのだからである。

秀逸な「書き手」であり、全ての素材をいかにも豊富よく（パラード・ランド）の風景へと転化してきた彼が、そのマニフェストで自らに課した方向性の果てでひとつの壁に突きあつた限界性、そうした限界性とは全く無縁に（内宇宙へ）沈んでいったひとりのシュルレアリスト作家：鳥尾麻雄の存在の確認と同時に、ここでその比較によつて浮かび上がるパラードの体質こそが重要であり、それがその後のパラードを規定するであろう。

それは結局（徳の喪失に他ならないと誰は考へる。（真の意味で）「私」として語り得ないパラード、外界を自己の内に集約する「むしろ内世界を外界に投影する」が二十世紀人だと語るパラードは、逆説的に言へば、サロートが指摘したような現代人の内的空白をこそ告白していると言へるだろう。

「終着の浜辺」で彼をささぎつたものは、まされもなくそうした内的空白の補償作用としての現代的・二十世紀的風景に対する執着だったろう。そして、それらがより積極的な意味を持つて、その後のパラードの

方向を決定しようように見えるのである。

「終着の浜辺」以後、パラードの活動は多様化する。（コンチネンスト・ノウエルと自ら名付けた作品群を中心に、（広告による自己主張、事故中の展覧会等、そうしたパラードに最早や一般的意味での「内宇宙」探険者の姿を見つけていることはできない）勿論、パラード的パラドックスを用いれば、それこそが「内宇宙」なのだが）パラードはより現代的（一時代的、刹那的）になり、ポップな彼の創作活動の中心になっていく。

最近の彼の創作活動の中心になっている（コンチネンスト・ノウエル）の著しい特徴は、ジャンナリステイックなキャラクター、例えはエリザベス・テイラー、マリリン・モンロー、ジャクリヌ・ケネディといつた人物を好んで取り上げる点だろう。それについてパラードはこんな風に説明している。今日、我々が「現実」と呼んでいるものは「虚構」にしか過ぎない。それはテレビ、広告、政府等によつて構築された（虚構）であり、我々の個人的生活すらその（虚構）に支配され始めている。例をあげれば、我々は海外旅行を思い立った時、航空券を買おうとするのではなく、スケジュールが着ているミニスカートといった特定の航

NW-PF vol.3

71/3

や会社のイメージを買っているのだ、とバラードは言う。そうした現代にあつて、スクリーンに於けるティーンやモノローは決して「虚構」としての意味にとどまてはいる。無数の媒体で世界中にばらまかれることによつて、湖や山脈と同レベルの「現実さ」へ今日的風景となつている、というのがバラードの論旨である。そこで「虚構」と「現実」は嚴重にも逆転して結局同一化してしまふ。

そうしたバラードの活動のより突進化した部分として「広告」があるだろう。作中で見すべからぬ生々な形で自己のアイデア、イメージ、主張を、読者にならず見てもらえる媒体によつて表現する。その法行はバラードの現在を象徴的に物語っているとは言えないか。

「わたしは『コンテンスト・ノウエル』と呼んでいる新しい作品群は『終着の浜辺』から出発している」とバラードは言う。とすれば、その脱北の原因こそ積極的にパネとしてバラードは出発しただろう。それは、個人的「内世界」への洗滌→普遍性への到達といった高尾放逐の志尚とは完全に相反するもの、即ち「現代」という「虚構」こそが全的「内面」であるような同時代的

~~~~~ スペキュレーションの会舞案内 ~~~~~

当社では実質的な会合を開催いたしております。この会は参加者個人の内宇宙だけのために行われるもので、「他者」や「集団」との関係を於いて行われる討論会ではありません。いかなる結論を持とうとするものでもなく、いかなる合意にも到達しようとするものもなく、いさゝかの記録も残さず、ただ参加者があり、聞くということだけが個人的に存在し、そこに思ひ活動があるだけで、従つて会としてはそこで「何も起らなかった」のであり、個人的な内宇宙にだけ「何が起っているかも知れない」のであります。

参加者にとってこの会は個人的な意味しかなく、参加した他人との友好を探めようとしたり、会に集った人々の集団に興味を持ったりするとはできません。いさゝかの現実的価値はありません。いわばジュール・アリスティックな会合であります。

1. 開会中の出入りは原則としてできません。
2. タバコ、酒、薬、毒物、ノートなど個人的な思ひに必要なものは持ち込めますが、筆記用具、テープレコーダー、カメラ、盗聴器などは持ち込めません。
3. 他人の発言の理解さに対し抗議できます。また他人の発言を間違いとみなすことはできません。(1+1=3といふぼう理解しなればなりません)
4. 発言は思弁的に行わねばならず、完全に了解済みのことを述べることとはできません。
5. 以上のルールのために、議長の特権が許されます。
6. 会の終了後、会でいかなることが起ったか、いかなる発言があったかというようなことを認めらることは誰もできません。会には原則的に参加者が個人的に参加し、個人的に思ひが行われただけであることを認識しなければならず、のちに裁判所、国会などに於いて証言の必要があった場合にも、この理論は犯せません。

前回の第1回に続き、4月中に第1回スペキュレーションの会を開催します。参加希望者は4月5日までに往復葉書でお申し込み下さい。会費は無料です。第1回のテーマは「J・G・バラード」ですが、本当のテーマは各個人の内的に存在するものであり、バラードを読んでもなくとも結構です。

この会に参加することを友人と相談したり、友人にさそいをかけたりすることなく、あくまで個人的に申し込みが行われることを望みます。

ボツパの世界である。「プリマ・ベラドンナ」から「時の声」、さらには「終着の浜辺」、ハコンデンスト・ノヴェルへへと転送してきたバラードの軌跡を懐なりに辿つてきた訳だが、最近の活動については資料不足と原文の難解のため

に明確な全体像は掴み得なかつた。それらの部分の紹介が進むにつれて、バラードの

新たな姿が浮かび上つてくるに違いない。それがどのまよなものであれ、六二年のマニフェストへは最早や滞り得ないものであり、つらいつつこのまよなマニフェストが書かれるをいものか。

ともあれ、バラードはどこへ行くか、その軌跡のビートルズとの近親性は干渉の武器となるか、とすれば何処へ?